

韓国人日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の印象形成 — 異なる属性を持つ母語話者の評価の相違 —

崔 文姫

1. 問題と目的

本研究の目的は、日本語学習者の発話に対し日本語母語話者が抱く印象と、その印象に関わる要因を抽出し、それらの要因間の関係を探ることである。

日本語学習者と日本語母語話者とのコミュニケーションにおいて、母語話者は学習者の発話をどのように捉えているのか、また、母語話者の印象形成に学習者の言語・パラ言語及び非言語的要素がどの程度影響を与えるのかなどについて実証的に検討していくことは、学習者が日本の社会で人々と円滑なコミュニケーションを行うための指針として、重要である。

一般的に、日本語学習者は日本語のレベルが上がるにつれ、意思を伝えるのに不自由を感じなくなる。しかし、意思を伝えることができても、待遇性や言外の意図などを適切に表現できないことから、相手や場にふさわしいことばが選べず、不躱な印象を与えたり、母語話者とは異なるイントネーションや談話展開から、相手に負担を感じさせたりすることもある。なお、このような問題がどの程度許容されるなどについては母語話者でも一様ではない。

母語話者による学習者の言語行動に対する評価についての先行研究としては、小池(1998)、原田(1998)、渡部(2003)、崔(2007)等の調査・研究がある。

小池(1998)・原田(1998)・中川ら(1998)等の報告によると、一般の日本語母語話者¹は、日本語学習者がコミュニケーションを進める際、その日本語の正確さよりも円滑なコミュニケーションを支える要素に注目し、表情等の非言語行動を重視する傾向があるのに対し、日本語教師は、一般の日本語母語話者よりも文法・語彙・表現等の言語的側面に注目し、非言語的な要素についてはそれほど注目しないとされている。

渡部(2003a)は、学習者の発話の評価について、一般の日本人は「印象」を、教

¹ 日本語母語話者で日本語教育を専門としていない人を指す。大抵の場合、日本語の文を誤りなく作り出すことができ、日本語のシステムに関して明示的・非明示的な知識を持った人を言う(原田1998)。

師は「日本語レベル」を、その中でも母語話者教師は「文法」、非母語話者教師は「発話」「ストラテジー」を重視する傾向があると報告しているが、この報告はその評価基準と会話の言語・非言語的な特徴との関連については言及していない。さらに、渡部(2003b)は、日本語母語話者が中国人学習者の発話を評価する際に、日本語の運用能力以外にも「親しみやすさ」や「積極性」というパーソナリティが評価基準になるとしているが、ここでは評価者(=日本語母語話者)の構成に偏りがあることから、評価者による評価の差の検討までには至っていない。

このように、これまでの研究は日本語教育の専門家から見た観察や内省による評価が多く、一般の日本人の間での諸属性などによる差を考慮していないため、現実のコミュニケーションにおいて何が重要とされているかが反映されていない可能性がある。

そこで、本稿では属性が異なる様々な日本語母語話者を対象に、韓国人学習者の発話に対する評価を調査し、異なる属性を持つ母語話者が韓国人学習者に対して抱く対人印象形成要因や、その要因の主要素を探っていくと同時にグループ間の差を考察する。加えて、学習者の発話に対する母語話者の「言語・パラ言語及び非言語的特徴に関する評価」が対人印象形成にどの程度影響を与えるのかを検討していく。

2. 方法

2.1 調査の概要

調査は、調査対象者(表1に示す)に学習者の発話ビデオを視聴してもらい、予め用意した質問紙上の各評価項目に5段階で評価をしてもらうという手続きで行った²。

調査は2004年7月から同年9月にかけて実施したもので、調査時間は、一人当たり約1時間半から2時間程度、評価者(=調査対象者)は東京都内や東京近辺に居住する日本語母語話者である。

評価の材料となる発話ビデオは、中級レベル以上の韓国人日本語学習者8名(男女4人ずつ)と日本語母語話者(男性、40代後半)による計8組の会話で、各組の会話は約5分間の内容となっている。会話はアルバイトの面接場面という設定で行い、学習者と面接官(日本語母語話者)は初対面である。

評価項目は、「言語・パラ言語及び非言語的特徴に関する評価」(以下、「言語・パラ言語・非言語評価」と称する)項目群と「対人印象に関する評価」項目群の2つから構成される。評価項目の選定においては、前者の項目は、先行研究(西郡1997、原

² 1人目の学習者のビデオを見終わったら、ビデオを一度止め、アンケート用紙に各評価項目について回答してもらう。2人目以降の学習者も同様の手法をとる。

田 1998、石崎 1999、渡部 2003) を参考にするとともに、日本語教師 3 名³に列挙してもらい、KJ 法 (川喜田 1967) を用いて分類・選定した。また、後者の項目も、先行研究 (大橋ら 1975、林 1978、林ら 1983、西郡 1997) を参考にするとともに、日本語教師 3 名⁴、院生 2 名、主婦 2 名⁵に列挙してもらった項目を KJ 法によって分類・選定した。その結果、それぞれ 20 項目ずつの評価項目が選定された。それらの評価項目に関しては下記の表 2 に示す。

表 1 調査対象者の構成

属性	日本語教師	大学生	主婦	社会人管理職	計
人数	30 人	31 人	37 人	33 人	131 人

2.2 分析方法

韓国人学習者 8 名の評価材料に対する母語話者の評価の代表値として、表 1 の 4 つのグループごとに各評価項目の得点の平均値と標準偏差を算出する。次に、各グループの項目別得点をもとに因子分析を行い、母語話者が韓国人学習者に対して抱く「対人印象」形成や「言語・パラ言語・非言語」評価についての要因やその要因の主要素を抽出する。

また、各グループにおける「対人印象に関する評価」と「言語・パラ言語・非言語評価」との相関関係を検討し、そこからさらに、重回帰分析を用いて「言語・パラ言語・非言語評価」が「対人印象に関する評価」に与える影響と、その主な要因が何かを明らかにする。これらのすべての分析には SPSS for Windows 11 を用いた。

³ 東京都内にある日本語学校の教師で、調査対象者には含まれていない。

⁴ 上記の 3 で述べた日本語学校教師と同一人物。

⁵ この二人も調査対象者には含めていない。

表 2 評価項目

I. 言語・パラ言語及び非言語的特徴に関する評価	II. 対人印象に関する評価
1.この人は、文法的に正しかったですか。(文法)	1.積極的な人だ。(積極)
2.この人は、一つ一つの言葉を正しく発音していますか。(発音)	2.責任感が強そうな人だ。(責任)
3.この人のイントネーション(抑揚)やアクセントは、正しく分かりやすいですか。(抑揚)	3.率直な人だ。(率直)
4.この人の話し方は流暢でしたか。(流暢)	4.親しみやすい人だ。(親しみやすい)
5.この人は、語彙の使い方が正しかったですか。(語彙)	5.元気な人だ。(元気)
6.この人の話し方は、丁寧でしたか。(丁寧)	6.自信のある人だ。(自信)
7.この人は、質問に適切に答えていますか。(適切)	7.誠実な人だ。(誠実)
8.この人は、単語や表現をよく知っていますか。(表現)	8.しっかりした人だ。(しっかり)
9.この人の話し方は、日本語的に自然でしたか。(自然)	9.信頼できそうな人だ。(信頼)
10.この人は、フィラーの使用が多かったですか。(フィラー)	10.好きになれそうな人だ。(好き)
11.この人は、語尾伸びが多かったですか。(語尾伸び)	11.知的な人だ。(知的)
12.この人は、途中終了の言い方が多かったですか。(途中終了)	12.魅力のある人だ。(魅力)
13.この人の話し方は、二人で対話することに協力的でしたか。(協力)	13.まじめな人だ。(まじめ)
14.この人の視線の合わせ方は、適切でしたか。(視線)	14.礼儀をよくわきまえた人だ。(礼儀)
15.この人のあいづちの打ち方は、適切でしたか。(あいづち)	15.明るい人だ。(明るい)
16.この人は、間の取り方が適切でしたか。(間)	16.好感の持てる人だ。(好感)
17.この人の話し方のスピードは、適切でしたか。(スピード)	17.活発な人だ。(活発)
18.この人は、表情が豊かでしたか。(表情)	18.話しやすい人だ。(話しやすい)
19.この人は身振り手振りが多かったですか。(身振り手振り)	19.協調的な人だ。(協調)
20.この人は、外見が魅力的でしたか。(外見)	20.落ち着いた人だ。(落ち着き)

* () の中は、以下の分析において用いる略称である。

3. 結果

3.1 「対人印象に関する評価」の因子分析結果

韓国人学習者の発話に対する母語話者の評価データをもとに、韓国人学習者に対し

て抱く「対人印象」の主要素は何かを検討するため、因子分析を行った⁶。カイザー基準に基づき、固有値 1.0 以上で因子数を決定した結果、各グループにおいて 3~4 因子が抽出された。因子名に関しては、それぞれの因子を構成する項目の内容や性格に基づき、林 (1978) を参考に筆者が便宜上命名したものである。

その因子分析結果の一例として、日本語教師の例を表 3 に示す⁷。

表 3 「対人印象に関する評価」についての因子分析結果例 (日本語教師)

項目	因子			共通性
	I	II	III	
明るい	0.81	-0.08	0.39	0.82
親しみやすい	0.81	0.23	0.18	0.73
魅力	0.68	0.29	0.20	0.58
話しやすい	0.80	0.27	0.21	0.75
活発	0.72	-0.17	0.51	0.81
元気	0.70	-0.12	0.57	0.83
積極	0.42	0.01	0.76	0.75
好感	0.75	0.45	0.17	0.79
好き	0.69	0.44	0.04	0.67
協調	0.51	0.48	0.03	0.49
まじめ	0.06	0.80	-0.04	0.65
信頼	0.23	0.79	0.21	0.73
誠実	0.17	0.78	0.14	0.65
礼儀	0.16	0.78	-0.06	0.57
知的	0.22	0.62	0.12	0.44
落ち着き	-0.04	0.61	-0.17	0.40
責任	0.13	0.67	0.38	0.61
しっかり	0.23	0.62	0.47	0.66
自信	0.18	0.12	0.72	0.56
率直	0.34	0.37	0.41	0.42
固有値	8.80	3.70	1.42	
寄与率	44.00	18.52	7.11	
累積率	44.00	62.52	69.63	
α 係数	0.93	0.91	0.86	
因子名	個人的 親しみやすさ	社会的望ましさ	活動性	

* 表中の網掛けは、それぞれの因子を構成する項目と判断したもので、因子得点の算出の際用いられる変数でもある。ここでは各因子の負荷量が0.40以上のものを因子得点の算出に用いた。

⁶ 因子の抽出には、主因子法・バリマックス回転を行った。

⁷ 4 つのグループにおいて同様の因子分析を行ったが、本稿では紙幅の都合で省略し、日本語教師の例だけを示すことにする。以降、ほかの分析結果についても、日本語教師のみを示す。日本語教師以外の分析結果は、崔 (2005) を参照されたい。

また、4つのグループが韓国人学習者に対して抱く対人印象形成要因を、因子分析とその因子の命名作業を行った結果に基づいて以下の表4に示す。

例えば、主婦の場合、第1因子は「社会的望ましさ」で、その因子の寄与率は52.86%を示し、第2因子は「個人的親しみやすさ」、第3因子は「活動性」となる。なお、各グループにおいて同一の因子名が存在するが、それぞれの因子の個別要因は異なることを断っておきたい。例えば、日本語教師の「個人的親しみやすさ」と主婦の「個人的親しみやすさ」のパーソナリティを構成する評価項目は必ずしも同一ではない。

表4 各グループにおける対人印象の主要因とその因子の寄与率

日本語教師	① 個人的親しみやすさ (44%) ② 社会的望ましさ (18.52%) ③ 活動性 (7.11%)	主婦	① 社会的望ましさ (52.86%) ② 個人的親しみやすさ (13.75%) ③ 活動性 (5.54%)
大学生	① 活動性 (35.56%) ② 個人的親しみやすさ (20.43%) ③ 社会的望ましさ (7.57%) ④ 堅実性 (5.22%)	社会人管理職	① 個人的親しみやすさ (41.89%) ② 社会的望ましさ (13.36%) ③ 堅実性 (5.92%)

3.2 「言語・パラ言語・非言語評価」の因子分析結果

次に、「言語・パラ言語・非言語評価」項目についても同様の因子分析を行い、共通因子を抽出した結果、グループごとに3~4つの因子が抽出された。

まず、日本語教師グループでは「言語としての明瞭性」「相手と関わるパラ言語・非言語的特徴」「相手と関わらないパラ言語・非言語的特徴」「視覚的な非言語的特徴」という4つの因子が、大学生グループでは「言語としての明瞭性」「相手と関わるパラ言語・非言語的特徴」「視覚的な非言語的特徴」「相手と関わらないパラ言語・非言語的特徴」の4つの因子が、学習者の「言語・パラ言語及び非言語的特徴」に関する評価をする際の潜在的な観点として働くことがわかった。また、主婦グループにおいては「言語としての明瞭性」「相手と関わるパラ言語・非言語的特徴」「相手と関わらないパラ言語・非言語的特徴」の3つの因子が、社会人管理職グループでは「言語としての明瞭性」「相手と関わらないパラ言語・非言語的特徴」「相手と関わるパラ言語・非言語的特徴」「待遇性」の4つの因子が、「言語・パラ言語・非言語評価」の潜在的観点として働くといえる。

以下、その一例として日本語教師の「言語・パラ言語・非言語評価」に対する因子分析結果を表5に示す。

表5 「言語・パラ言語・非言語評価」についての因子分析結果例（日本語教師）

項目	因子				共通性
	I	II	III	IV	
文法	0.86	0.15	-0.13	-0.04	0.78
語彙	0.85	0.09	-0.04	-0.03	0.74
自然	0.81	0.21	-0.05	0.04	0.71
表現	0.76	0.12	-0.06	0.02	0.59
流暢	0.73	0.30	0.03	0.16	0.65
発音	0.71	0.04	-0.09	0.04	0.52
抑揚	0.71	0.16	-0.09	0.07	0.54
適切	0.55	0.37	-0.17	0.09	0.48
丁寧	0.53	0.35	-0.28	-0.04	0.49
スピード	0.52	0.44	-0.04	0.04	0.47
あいづち	0.29	0.83	-0.06	0.00	0.78
間	0.33	0.74	-0.13	0.06	0.68
協力	0.12	0.62	0.00	0.19	0.44
視線	0.06	0.61	-0.02	0.29	0.46
語尾伸び	-0.04	-0.10	0.83	0.22	0.75
フィラー	0.02	0.04	0.66	0.12	0.45
途中終了	-0.20	-0.10	0.53	-0.10	0.34
身振り手振り	-0.25	-0.05	0.43	0.42	0.43
表情	0.03	0.26	0.22	0.93	0.99
外見	0.17	0.20	0.03	0.57	0.40
固有値	7.25	2.83	1.98	1.15	
寄与率	36.27	14.14	9.89	5.76	
累積率	36.27	50.41	60.30	66.06	
α 係数	0.92	0.82	0.72	0.67	
因子名	言語として の明瞭性	相手と関わる パラ言語・非言語	相手と関わらない パラ言語・非言語	視覚的な 非言語的特徴	

3.3 「対人印象に関する評価」と「言語・パラ言語・非言語評価」との相関

各グループの因子得点に対して、ピアソンの積率相関係数を使って「対人印象に関する評価」と「言語・パラ言語・非言語評価」との相関を求めた結果、それぞれのグループにおいて学習者に対する「言語・パラ言語・非言語評価」が、学習者に抱く「対

人印象に関する評価」に関わっている部分と、関わっていない部分があることが分かった。つまり、学習者の「言語・パラ言語・非言語的特徴」に関する評価結果のすべてが母語話者の学習者に対する「対人印象」形成に影響を与えるのではなく、ばらつきがあるように思われる。そこで、さらに、「対人印象に関する評価」は、「言語・パラ言語・非言語評価」からどの程度正確に予測・説明できるか、また、その予測において重要な因子は何かを明らかにするために重回帰分析を行った。その結果、対人印象形成要因に最も影響を与える学習者の「言語・パラ言語・非言語特徴」は、グループごとに異なると解釈できることが判明した。

表6 「言語・パラ言語・非言語評価」が「対人印象に関する評価」に及ぼす影響
(日本語教師例)

	対人印象に関する評価					
	個人的親しみやすさ		社会的望ましさ		活動性	
	B	ベータ	B	ベータ	B	ベータ
言語としての明瞭性	-0.03	-0.04	0.12	0.15*	-0.10	-0.17*
相手と関わるパラ言語・非言語的特徴	0.50	0.26*	0.70	0.41*	0.32	0.29*
相手と関わらないパラ言語・非言語的特徴	-0.18	-0.09*	-0.35	-0.19*	-0.05	-0.04
視覚的な非言語的特徴	2.12	0.76*	0.63	0.25*	1.09	0.66*
重回帰係数 R	0.81		0.62		0.74	
重決定係数 R ²	0.66		0.39		0.55	

*p<0.05

B : 偏回帰係数、ベータ : 標準偏回帰係数

表6から、日本語教師の学習者に対する印象の第1因子「個人的な親しみやすさ」という観点においては、学習者の「視覚的な非言語的特徴」「相手と関わるパラ言語・非言語的特徴」に対して評価が高くなる、つまり印象がよくなると予測される。逆に「相手と関わらないパラ言語・非言語的特徴」が多く現れる学習者に対しては、「個人的親しみやすさ」という点における印象が悪くなる。つまり、日本語教師は、特に学習者の「表情」「外見」「身振り手振り」のような「視覚的な非言語的特徴」を主な基準として、「個人的な親しみやすさ」という点における印象を判断すると言える。なお、「視覚的な非言語的特徴」「相手と関わる非言語的特徴」「相手と関わらない非言語的特徴」が「個人的親しみやすさ」を予測・説明する割合は、66%である。

さらに、日本語教師による学習者の印象評価を分析した結果、「言語としての明瞭性」という観点から、学習者に対する「個人的親しみやすさ」という点での印象と関係がないこと、対人印象の一つである「活動性」という点での印象とは負の相関があること、また、「社会的望ましさ」との関係においては有意ではあるが、その相関がとても弱いことが分かった。

次に、大学生グループにおいて同様の分析を行った結果、「言語的・非言語的特徴に対する評価」項目の中で「対人印象に対する評価」に影響を与える因子は、「言語としての明瞭性」「相手と関わる非言語的特徴」「視覚的な非言語的特徴」であり、「相手と関わらない非言語的特徴」因子はあまり関わらないことが分かった。

表情が豊かで、身振り手振りが多い（「視覚的な非言語的特徴」を満たした）学習者、また、あいづち・間の取り方・視線が適切で対話に協力的という「相手と関わる非言語的特徴」を持った学習者には、大学生は「活動性」という観点の評価が高くなる、つまり印象がよくなると予測される。特に、学習者の「表情」や「身振り手振り」等といった「視覚的な非言語的特徴」が、「活動性」という点に関する印象の判断基準として大きく働く。大学生の対人印象の第2因子である「個人的親しみやすさ」においても、「相手と関わる非言語的特徴」を持つ学習者や、「視覚的な非言語的特徴」を持った学習者に対して、評価（印象）が良くなると考えられる。また、あいづち・間の取り方・視線が適切で、二人の対話に協力的、かつ、言葉が丁寧であるという「相手と関わる非言語的特徴」を持った学習者に対し、大学生の「社会的望ましさ」という観点における評価も高くなると予測される。さらに、大学生における対人印象形成要因の一つである「堅実性」に関しても、「相手と関わる非言語的特徴」を持った学習者に対し、印象がよくなることが分かった。また、日本語が流暢でイントネーションやアクセント、発音がうまく、文法や日本語の単語や表現をよく知っているという「言語としての明瞭性」と「堅実性」との間には負の相関があり、韓国人学習者が言語的に正確で流暢であるほど、「堅実性」という観点における大学生の印象は悪くなると言える。

主婦グループにおいては、間の取り方がうまくあいづちを適切に打ち、二人の対話に協力的で、表情豊かに表現できる等の「相手と関わる非言語的特徴」を持った学習者に対しては、「社会的望ましさ」という観点における評価が高くなると予測される結果となった。つまり、主婦は、間の取り方やあいづち、視線等の非言語を通したコミュニケーションを適切に行なう能力を持つ学習者に対して、主婦の第1因子である「社会的望ましさ」という点においてよい印象を持つことが明らかになった。また、「相手

と関わる非言語的特徴」を持ち、また、語尾を延ばす言い方、最後まできちんと言い切らず文を終了する言い方、フィラーを多用する学習者においては、「個人的望ましさ」という観点に関する評価（印象）が良くなると考えられる。しかし、日本語の文法や発音・アクセント等が正しく、日本語として自然で流暢に話せるという「言語としての明瞭性」を持った学習者に対しては、「個人的親しみやすさ」という点での印象が悪くなる。一方、あいづちや間の取り方がうまく、また、対話に協力的で、視線の合わせ方が適切な学習者、表情豊かで外見が魅力的な学習者に対しては、「個人的親しみやすさ」という点に関する印象がよくなると言える。「活動性」という観点においては、「相手と関わる非言語的特徴」を持った学習者に対して評価を高くすると予測される。しかし、ここでも、「言語としての明瞭性」の評価と「活動性」の評価との間には負の相関があった。つまり、韓国語学習者がいくら言語的に正確で流暢であっても、それが必ずしもその学習者の「個人的親しみやすさ」や「活動性」という点において良い印象を抱く方向に作用するとは言えず、むしろ悪い印象を抱く方向に作用する傾向があると言える。これに対して、「間の取り方」「あいづち」「対話に協力」「表情」「視線」「外見」等と言った非言語的要素は、学習者の「個人的親しみやすさ」や「活動性」というパーソナリティに関する評価につながると考えられる。

最後に、社会人管理職における分析結果、表情が豊かで外見が魅力的、かつ、視線やあいづちが適切という「相手と関わる非言語的特徴」を持つ学習者、また、語尾伸び・途中終了の言い方・フィラーを多用するという「相手と関わらない非言語的特徴」を持った学習者には、対人印象の第1因子である「個人的親しみやすさ」という観点に関する評価が高くなると予測されることが分かった。しかし、言葉が丁寧で、質問に適切に答え、かつ、二人の会話に協力的な「待遇性」を持った学習者にはそれらの項目の評価が高くても影響がそれほど出ないと予測される。特に、社会人管理職の対人印象の第1因子「個人的親しみやすさ」の評価基準としては、学習者の「表情」「外見」「視線」「あいづち」といった非言語的特徴が強く影響するという結果となった。また、「相手と関わる非言語的特徴」を持ち、言葉が丁寧で、質問に適切な答える、かつ、二人の会話に協力的な「待遇性」を持ち、発音が正しくて語彙や表現をよく知っていて流暢に話せる等の「言語としての明瞭性」を持った学習者には、「社会的望ましさ」の評価が高くなると考えられる。さらに、「待遇性」を持つ学習者や、表情豊かで外見が魅力的、あいづちや視線が適切という「相手と関わる非言語的特徴」を持った学習者に対しては、「堅実性」という点に関する印象の評価がよくなると予測される。

以下、各グループにおける重回帰分析の結果、明らかになったことを表7にまとめる。

表7 印象形成要因とそれに影響を与える「言語・パラ言語・非言語」要素

	個人的 親しみやすさ	社会的 望ましさ	活動性	堅実性
日本語教師	対人印象 第1因子 ① 表情→外見→ 身振り手振り ② 槌→間→協力 等 語尾延び→フィ ラー→途中終了	対人印象 第2因子 ① 相槌→間→ 協力等 ② 表情→外見 →身振り手 振り ③ 文法→語彙→ 自然→表現等 (弱い相関) 語尾延び→フィ ラー→途中終了	対人印象 第3因子 ① 表情→外見→ 身振り手振り ② 相槌→間→協力 等 文法→語彙→自然 →表現→流暢等 (弱い相関)	
	対人印象 第2因子 ① 相槌→間→視 線→協力等 ② 表情→身振り手 振り	対人印象 第3因子 相槌→間→視線 →協力等	対人印象 第1因子 ① 表情→身振り 手振り ② 相槌→間→視線 →協力等	
主婦	対人印象 第2因子 ① 間→相槌→視 線→表情→協 力等 ② 語尾延び→フィ ラー→途中終了 →身振り手振り 文法→自然→抑揚 →流暢→表現→語 彙等 (かなり高い 負の相関)	対人印象 第1因子 間→相槌→視線 →表情→協力等	対人印象 第3因子 間→相槌→視線→ 表情→協力等 文法→自然→抑揚 →流暢→表現→語 彙等 (かなり高い 負の相関)	
	対人印象 第1因子 ① 表情→視線→相 槌→外見 ② 語尾延び→フィ ラー→身振り手 振り→途中終了 丁寧→適切→協力	対人印象 第2因子 ① 表情→視線 →相槌→外 見 ② 丁寧→適切 →協力 ③ 発音→流暢→ 語彙→抑揚→ 文法等 (やや高 い相関)		
社会人管理職				

*表中の①②③は、その「対人印象」因子に影響を与える「言語・パラ言語・非言語」因子に影響が強い順に並べ、さらに因子ごとにその構成要素を因子得点の順に示したものである。

*「———」以下の項目は、その「対人印象」因子と負の相関をみせたものである。

4. 考察

今回、中級レベル以上の韓国人学習者のアルバイト面接という限られた発話場面ではあるものの、母語話者が韓国人学習者に対して抱く印象形成要因は、母語話者の社会的属性によって異なることが明らかになった。また、学習者の言語・パラ言語・非言語的な特徴が、母語話者の学習者に対する印象形成に与える影響においても社会的属性によって差があることが判明した。

特に注目したいのは、日本語教師の結果である。日本語教師において、対人印象の第1因子である「個人的親しみやすさ」と「言語としての明瞭性」因子との相関が全くなく、それより「表情」「外見」「あいづち」「間の取り方」等のパラ言語・非言語的特徴との間で相関が強い現象が見られ、また、第2因子である「社会的望ましさ」についても「言語としての明瞭性」との間には弱い相関しかなく、「あいづち」「間の取り方」等のパラ言語・非言語要素が強く作用しているという結果となった。

「日本語教師は言語形式に対して厳しく評価し、非言語的要素については、一般の母語話者より評価基準に厳しくない」という先行研究での報告や、河野ら(1998)の「日本語教師は、特になじみの深いものについては評価が厳しくなる」という報告からも分かるように、一般に日本語教師は「言語としての明瞭性」という観点が、学習者に抱く対人印象にも強く影響すると予測される。しかし、今回はそれを裏づける結果にはならなかった。常に日本語学習者に接している日本語教師にとって、学習者に対して抱く印象においても彼らの話す言語能力が大いに作用されると思っていたが、逆に、仕事柄、日本語教師は一般の日本語母語話者に比べて、学習者の言語能力と彼らに抱く印象との相関を切り離して考えられる能力を持っているとは言えないだろうか。むしろ、日本語が上手な学生には親近感などを持ち、日本語が上手ではない学生には親近感など持てない、といったような意識を日本語教師が抱いていたらいかがなものだろうか。

もう一つ興味深いのは、主婦と社会人管理職における対人印象形成要因である。今回の結果では、主婦が韓国人学習者に対して抱く対人印象形成要因の中でもっとも影響が強いのは「社会的望ましさ」であり、一方、社会人管理職の第一因子は「個人的親しみやすさ」であった。一般に、社会人管理職の場合、彼らが属している環境から様々な社会人に接しているため、「まじめ」「誠実」「礼儀」「落ち着き」等といった「社会的望ましさ」という観点を重んじ、逆に主婦の場合は、その生活範囲から考えると「個人的親しみやすさ」という観点を重んじると予測される。しかし、本調査では、社会人管理職の場合、「社会的望ましさ」よりも「個人的な親しみやすさ」に関しての

評価が、主婦の場合は「個人的な親しみやすさ」より「社会的望ましさ」という観点からの評価が、学習者に対する印象形成に強く影響するという結果となった。

この結果から考えられるのは、社会人管理職の場合、「まじめ」「誠実」「礼儀」「落ち着き」等といった「社会的望ましさ」というパーソナリティを人間ならば誰もが当然持っているものと認識しており、今回韓国人留学生という普段あまり出会えないと思われる人に対して、「社会的望ましさ」以外のその人個人が持っている「表情」「外見」「明るさ」「積極さ」等といった「個人的親しみやすさ」という観点を中心に評価をしたためではないだろうか。また、主婦の場合は、それとは逆に「個人的親しみやすさ」というパーソナリティを人は当然持っているものと認識しており、韓国人留学生がこれから社会に出て円滑に生活するためのことを考えて、「個人的親しみやすさ」以外の、「まじめ」「誠実」「礼儀」等といった「社会的望ましさ」というパーソナリティを中心に評価したと解釈できるのではないだろうか。

さらに、学習者の「言語・パラ言語・非言語」要素の中で「対人印象」形成に一番影響を与える要素は何かに注目すると、日本語教師における第一因子「個人的親しみやすさ」には「表情」「外見」「身振り手振り」という非言語的特徴が、大学生における第一因子「活動性」においても「表情」「身振り手振り」といった非言語的特徴が一番影響を与えている。また、主婦における対人印象形成の第一因子「社会的望ましさ」には「間の取り方」「あいづち」「視線」「表情」等のパラ言語・非言語的特徴が、社会人管理職における第一因子「個人的親しみやすさ」には「表情」「視線」「あいづち」「外見」というパラ言語・非言語的特徴が影響を与えていることが分かった。

母語話者が韓国人学習者に抱く対人印象形成には、各々のグループで異なる潜在的観点が基準になるものの、その潜在的な因子に強い影響を与えるのは、学習者の言語的要素よりもパラ言語や非言語的要素であるという点は、4つのグループに共通する。しかし、日本語教師や大学生は「表情」「外見」「視線」といった「視覚的な非言語的要素」が対人印象に大きく影響を与えることに対し、主婦においては「間の取り方」や「あいづち」等の「コミュニケーションの遂行能力と関わるようなパラ言語的特徴」が対人印象に一番影響を与える。また、社会人管理職のそれも主婦よりは弱い、日本語教師や大学生に比べると「パラ言語的な要素」が大きく関わるということが分かった。すなわち、日本語教育現場では、この相違点を認識し、教師自身の評価や指導内容を内省する必要があるといえよう。なお、中級レベル以上の学習者の言語的特徴は、母語話者の学習者に対する印象形成にそれほど大きく影響しないという今回の結果から、これからの日本語教育においては、パラ言語・非言語的要素をもっと積極的に取り入

れた教育の工夫が必要であろう。

5. 今後の課題

今後の課題として次のような事柄が挙げられる。

まず、今回の調査は日本語学習者とはいえ、韓国人学習者に限られたものであった。このようなコミュニケーション上の問題は、他の言語・文化背景を持つ学習者においても同じことが言えること、さらに、他の言語・文化背景を持つ学習者における母語話者の評価には違いがあると思われることから、今後様々な学習者を対象として同様の調査を行わなければならない。

第二に、評価者である母語話者の年齢や性別、方言などによる評価も調査していきたい。今回は方言の影響が少ないと思われる東京や東京近辺に住む母語話者を対象に、属性別分析を行ったが、評価者の年齢、性別、方言などによる違いがあると思われることから今後更なる検討をしていきたい。

第三に、今回は刺激として学習者のアルバイト面接場面をビデオで収録したものを用了が、ビデオで撮られるという心理的な負担などが学習者の会話を不自然にした可能性が考えられる。今後は、できるだけ自然に近い形で発話場面を収録できるよう工夫していきたい。

付 記

本稿は、2006年度「国語国文学会」において発表した内容に加筆・改訂したものである。本研究の調査にご協力いただいた多くの方々及び常に調査場所を快くご提供くださった会社C2Lの金英哲さんにもこの場を借りて御礼申し上げる。

参考文献

- 石崎晶子 (1999) 「学習者の言語行動に対する母語話者の評価」『第二言語としての日本語の習得研究』3、19-35
- 大橋正夫・平林進・長戸啓子・吉田俊和・左伯道治 (1975) 「性格の印象評定における面接法と質問紙法」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』22、83-101
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中央公論社
- 河野俊介・松崎寛 (1998) 「一般日本人と日本語教師の音声評価の差異」『日本語教育方法研究会誌』5-2、24-25
- 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本

- 人のずれ—初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価—『北海道大学留学生センター紀要』2、138-155
- 小池真理・原田朋子・小林ミナ（1998）「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般人のずれ」『日本語教育方法研究会誌』5-1、32-33
- 崔文姫（2005）「韓国人日本語学習者の言語・非言語に対する日本語母語話者の印象形成要因—異なる属性を持つ日本語母語話者の評価を通して—」『修士論文』東京都立大学 未公刊
- _____（2007a）「韓国人学習者の発話の数量的データと母語話者が学習者に抱く対人印象との相関分析」転載：文部科学省科学研究費報告書（基盤研究C(2)）「談話研究と日本語教育の有機的総合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作」（研究代表者：宇佐美まゆみ）2007、東京都立大学・首都大学東京、日本語研究会『日本語研究』27号、15-32
- _____（2007b）「日本語学習者の発話に対する日本人の評価—韓国人の日本語学習者に対する印象とその印象に影響を及ぼす要因—」計量国語学会、『計量国語学』26巻2号、47-63
- 中川道子・石島満沙子（1998）「会話の上達度を計る評価基準」『北海道大学留学生センター紀要』2、169-185
- 西郡仁朗（1997）「外国人と日本人の初対面会話の分析—数量的に見た特徴と印象の形成について—」『科研費報告書 日本人談話行動のSCRIPT・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』基盤研究(C)(2)、58-74
- 林文俊（1978）「対人認知構造の基本次元についての一考察」『名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）』25、233-247
- 林文俊・大橋正夫・廣岡秀一（1983）「暗黙裡の性格に関する研究（I）—個別尺度法によるパーソナリティ認知次元の抽出—」『実験社会心理学研究』23-1、9-25
- 原田朋子（1998）「一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか」『北海道大学留学生センター紀要』2、157-167
- 渡部倫子（2003a）「日本語口頭運用能力の評価基準—評価者による相違—」『日本教科教育学会誌』25-4、11-17
- _____（2003b）「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価—評価尺度開発の試み—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部52、175-183

（ちえ むんひ・首都大学東京大学院生）